

東北比較文化学会(TACC)会報

May 1981 No.2

事務局 青森県弘前市総町13-1

弘前学院大学英米文学佐藤研究室

編集兼発行者 山浦拓造

電話 (0172) 34-5211 内線 73

比較文化学への期待

副会長 花田 隆

今日、私どもはその生活に関連するさまざまな国際的ニュースに接するわけであるが、それらをどのように理解し判断したらよいか戸惑うことが少なくない。例えば、カナダのウォールという青年が昨年十二月伊東市の漁港でロープをはずし、捕獲してあった一五〇頭のイルカを逃がし威力業務妨害、器物破壊罪に問われていた所謂イルカ裁判で懲役六カ月、執行猶予三年の判決が出た。外国人が議論を吹掛けそうな恰好のニュースだから、私どもも自分なりのきちんとした意見を持っていないと、いくら外国語が流暢に話せても「イルカ殺しの野蛮」の類いとみられかねない。

ところで、かような国際的なトピックスについて考える場合、私どもは三つの側面からアプローチすることが出来る。第一は、最もオーソドックスな「論理的な」側面である。今更説明は要らぬと思うが、イルカ問題を例にとれば、茲では、水産資源としてのイルカや鯨の捕獲を防ぐために現在イルカを止めるべきなのか、どうか。イルカを逃がすことは日本人の食料と仕事を奪うことで、最適頭数を越えた分は捕獲を認めるべきかと思うが、いずれにしろ、それには先ず客観的な調査資料に基いた検討が必要である、といった具合の議論である。

第二は、「謀略的な」側面を把握し裏情報も利用することである。日本(人)としては道義的立場を踏みはずすべきではないが、相手の謀略はこれを見抜き賢明に対処する術も心得ねばならない。これは私どもの最もウィークな分野で、かなり国際的にも知れわたっている。根が正直過ぎるのである。ユダヤ系米国籍貿易商 Abraham Lawi 氏もその近著 Plot against the Japanese. の中で、日本人は話をまともには聞き過ぎるゝなる見出しの下に、米国政府が sea lane 保障等を持出し防衛努力を求めるのは、要するに米国からもっと武器を買え、ということなんだ。なにに日本の対応は実に歯がゆい。なんで、「なら、代りにトラック等軍需物資を何処へでも売ることを認めよ」とハーゲンしないのか、と忠告している。イルカで言えば、日本商品ポイコットをねらう欧米一部企業の Watergate (つまり、イルカ保護を叫ぶ団体に幽霊法人経由で活動資金を流し反日感情を煽っている謀略)を曝き地元公衆にアピールすることである。TBS・TV番組「現場検証・誤解」等も有力な材料になり得よう。

第三は、「文化的な」側面である。同一の事件が文化的基盤が異ると受取る意味も対応の仕方も違ってくる。幸い今日、人間・物質・情報の国際的交流が増するに伴い次第に全世界における文化的 *gap* が解消されつつあるが、未だ未だ不十分である。私どもは彼等の文化比較により相互の誤解をとき徒らに感情を奔ることを戒めねばならない。わが国では海の動物は全て魚貝類と称し長年食べ続けてきた。生物を殺生して食べるのは摂食同化することなのだ。欧米人が皮や油で儲けるためラッコや鯨を殺したのとは意味が違う。日本ではイルカも欧米人が殺生を認める家畜と同じ文化的位置を占めるのである。彼等はまた、イルカは高等動物だ、と主張するが、それは、賢く高等でない者はやつけても奴隷にしてもよい、という人種差別等にも通じる悪しき Social Darwinism に基づく議論であることに気付いて貰うことである。文化人類学や比較文化学は、かかる領域にもかかわらず、寄与できる可能性が大きい筈である。もちろん学問はなにも直接、現実的問題の解決を志向する営みではない。

研究が実践的課題のみに限定される対象ローカリズムには厳に注意が必要であろう。しかし、好むと否とに拘らず今後私どもの生き方には比較文化的知見が益々求められるようになることだけは間違いあるまい。本学会の発展と会員各位のご活躍が期待されるゆえんである。

(弘前大学 教育学部)

「山形大学比較文学・文化研究会」活動状況

山形大学 飯島武久

「山形大学比較文学・文化研究会」は昭和五十二年五月に、主として当大学の外国語教育有志によって設立された。以来、広い視野からの日本文学・文化の研究・外国文学（文化）と日本文学（文化）の周辺又は対比等を取り扱う研究を学内外に公開してきた。毎年二回、春と秋に例会が持たれ、今年の六月初旬に開かれる第8回例会では、学内の講師が「ギリシャ神話と三島由紀夫」と題して研究発表を行なう予定である。

次に、参考までにこれまでの研究発表のテーマを記す。（数字は大会の回数）

- (1) 我国のストリンドベリイ受容の一面
- (2) 日本におけるエミリ・ブロンテ研究
- (3) 『智恵子抄』翻訳におけるクロス・カルチュアの諸問題
- (4) 鵬外とゲーテ——「諦念」の問題を中心として——
- (5) 永井荷風とモーパッサン
- (6) 『吾輩は猫である』における「遊び」の問題——『トリストラム・シャンディ』と関連して——
- (7) ニーチェの「狂気」と斎藤茂吉

福島支部報告

福島県立医科大学

引地 岳雄

一九八〇年六月七日、福島市「えびすグランドホテル」での第二回大会席上、「福島支部」が誕生し、初代支部長に、福島県立医大・森一教授が選出された。一九八〇年十一月十五日、桜の聖母短大に於て、福島支部十一月例会が左記のとおりの日程で開催された。

記

プログラム

支部長挨拶

懇話会・テーマ「人間と老化」

司会 桜の聖母短大 斎藤英二

「文学作品にあらわれた老人像」

泉立医大 芳賀 馨

「人間と寿命」 泉立医大 南条善治

「生物と人間の老化」

泉立医大 森 一

懇談会・「今後の支部運営について」

司会 泉立医大 引地岳雄

なお、同席上、支部委員として、泉立

医大・引地岳雄助教と桜の聖母短大・

斎藤英二助教を選出した。次期支部例

会は一九八一年六月二十日、桜の聖母短

大で、研究発表を中心にして開催される

ことが決まった。

男・女と、文・化論

福島県立医科大学

森 一

人間社会で一番安定しているものは何か、というと、男女の比率が一对一だということではあるまいか。戦争で男子が激減しても、しばらくすると一对一に戻るから不思議である。このように数の上ではフランスがとれている男女が、性格、行動、嗜好となると、まさに対比的でもある。男が奮うと、女は裏切るものだ（シェークスピア）ではひどすぎるかもしれないが、自然は女性を原理に従うよりも感情に従って行動するように創った、とか、男は思索と勇氣のために、女は柔和とゆかしき典雅（みやび）のためにつくられた、といった表現はますます人をうなずかせるものがある。

このように対比してみると、男性社会には男性的文化が、女性社会には女性的文化が、かもし出されることになる。その昔、文化第一号として、中国から伝来したゴツゴツした漢字と漢文が、自家製の片仮名を加えて男子専用となり、流れるような美しさの平仮名を女子専用として、女流文学を育んだようなものである。

さて、文化という語を、文と化に分けて論じるとは分裂病者の発想であるが、中国の古語である説文には、文は筆

画を紙上に重ねた紋様の形であって、よってアヤをなしている様を表したものである。また紋（織りもよう）の原字と考えた方がよく、いろいろな色と形を呈するものを文といい、文章・文学の文とは、ことばのアヤの意に転じた用法である、と説く学者もいる。それでは化とは何か。左の扁は人の左側を示し、右のつくりは人の変化した姿（若い人が年をとると、白髪を加え、腰が曲った形を逆さにしてある）であるという。まことに人間臭い字で、化学変化に伴う物の臭さは感じられない。

ここで分裂病者は、女性は文を担当し、男性は化を担当してきたと見るのである。女性は昔も今も、衣服や花や絵画の美にひかれ、布を織り筆を走らせ、文章を記しつけてきたが、男性は何をしてきたか。思索と勇氣はよいとして、科学と科学技術の船頭として激流を矢のように下ってきてもいいまいか。そこには化学的臭いも立ちこめている。

その科学は止めどもなく発達する。いやむしろ限りなく発達するから困る。ブレーキが装備されていない、終着駅も示されていない列車のようなものだ。その科学は前進しても、人間自身はちっとも変わらないばかりか、全体としてはつねに人生を離れていく。これを何とか抑える者がいるだろうか。いるとすれば女性だけであろう。女性の化は変らざること山のごとし、の化であるが、男性の化は、

変化のみの化であり、今に人類が全体として白髪になりひっくりかえるのではあるまいか。文化という字を用意してくれただのは、そうした見通しがあつたのだらうと、分裂病者は考えてみた。文明とは何か、すばらしい女性の姿だ（エマーソン）。男女同権とは、男の地位が、女の地位にまであがつたことなのです（太宰治）。

自然界の植物、動物の体のつくりは、一貫して、円、球、左右対称である。一眼や、片足を失つた鳥がどのような運命に陥るか。バランスをとる形を整えるために、生命は数億年もの時間を刻みつけてきたが、人間が変化の表徴としての科学の粋をこめて作った。自動車、新幹線、スペースシャトルも、結局は、単細胞の原生動物や、バランスのとれた鳥の姿に近づいたにすぎない。文と化が、それぞれ思いのままの方向に進めば、片翼はおろか、両翼の無い鳥の姿にならう。

第三次「新思潮」

の作家たち

山形大学工業短期大学部

早川 正信

およそ、川というものが流れているところには、必ず岸が存在する。しかも、川岸は兩岸をもつて川を粹づけているわけである。もし、片方の岸しかもない川があつたとすれば、もはや、それは川にあたいしないだろう。当然のことなが

ら、それら兩岸からは、それぞれ異つた眺望を得ることができる。もし、その眺望がひとつだなどと強調したらおかしいことになるらう。

私はいま、日本の大正時代の文学作品を比較文学的に見て行こうと目録んでいるが、これらの文学作品をひとつの川の流れにたとえることもたしかに可能となる。その兩岸には国文学的視点からの眺望と、この時代ならではの比較文学的眺望という二つの視点が成り立つものと考えている。というのも、大正という時代が、明治、昭和とはちがった、ある意味で高踏の時期であり、若い新進の作家達が、同好のグループをなし、よきにつけあしきにつけ、この時ほど互に影響を与えたり、影響を受けたたりした時は、わが国の文学史上なかつたのではないかと思われ、しかも、外国文学の紹介、あるいは味読という点においてもユニークな色を帯びているからである。

とくに、第三次「新思潮」同人として集いよつた作家達、戯曲、小説の山本有三、久米正雄、草田杜太郎（菊池寛）、小説の柳川隆之介（芥川龍之介）、豊島与志雄、松岡譲というような人々が、その作家生活の習作期をいかに送つていたかが窺えて興味深いものがある。その習作期に、後期では窺えない本當の姿が、不用意な恰好で現われているのを見ると、むしろ人間としての魅力を垣間見ることにもなる。

その創刊号（大正3・2）には小山内薫「俳優の見たるマーテルリンク」、秦豊吉「シヨニツレル『輪舞』の三」、「小間使と若主人」などがあるが、とくに後者はのちに芥川が下敷きにして自分の作品に鍍直そうとしたりするものがある。もちろん一方では、この「輪舞」のワイセツ性（と當時の官権はみたようだ）から、発売を控えられたこともあつて、第三次「新思潮」の経営に大打げきを与えるなど、それほど当時としては大胆な内容であつた。このほか号を追つて、菊池のシング紹介、山本のストリンドベリイの翻訳、など、ほとんどが、外国の文芸の紹介、試訳がその中心となつている。

以上のような動向は、大正という時代をどうみるかという問題と深くかわるものでもあろう。そして、そのひとつの新たな視点として、こうした作家の群像が、お互いに文芸的な意味でどのようにかかわりあつていったかという探索を、大正の時代を生きた人々の精神史を明らかにするひとつの踏み石であらうと考えている。

郡山女子大・文化学科の開設

郡山女子大学学長

関口 富左

郡山女子大学では短期大学部に文化学科（定員七五名）の新設が認められ、こ

の四月から約一〇〇名が入学した。このようなコースは全国では初めてであり、文部省、全国の大学はもとより地方自治体からも注目を集めている。学生は将来、公民館、図書館などで、社会教育主事、学芸員、司書等の資格が得られることになり、地域文化の発展はもとより、社会教育担当の専門養成のパイオニアとして、大きな期待を集めている。

講義科目として、文化人類学、文化史、地域文化論、民俗学、美学、美術史、考古学、言語学、演劇概論、芸能論、芸術鑑賞などの教養科目に、自然科学概論、専門科目的性格の科目として、図書館通論、博物館学、公民館通論、社会学などの科目が盛沢山に用意され、学生ならずとも教養のために聴講を希望する者が多い。（森 一記）

弘大における国際交流

——総論から各論へ——

TACC事務局長

西村 清巳

四月二十八日から五月十二日までの旅は、これまでになく、疲れるものであつた。アンカレッジ経由でハンブルクに飛び、ケルン行の飛行機に乗り換え、汽車に揺られてオランダ、ベルギーの国境に近い、最初の目的地アヘンに着き、次の日はパリに飛ぶという調子で、ヨーロッパ・

アメリカの旅を二週間で果したのでから、疲労も満更年のせいばかりではあるまい。今度の旅行は、大池・弘前大学長のアメリカはテネシー大学マーチン校(U T M)訪問に、国際交流委員長として同行するのが主たる目的であった。

弘大は、これまでにU T Mと十年近い交流があった。T A C C副会長の花田氏、山本、太田両理事もU T Mを訪れたことがある。今回これを姉妹校関係に発展させ、昨年十二月のスミス学長の弘大訪問になった。大池学長の訪問は答礼の意味があった。

これまでも各種の問題があったが、いわば、「総論」の難しさであった。今度、弘大が提供した奨学金で、両校ともそれぞれ相手校の学生を招く態勢がとけると、別種の困難が生じてきた。「各論」の難しさである。

奨学金を与えて学生を招けば、それで能事終われり、とつかない所に国際交流の難しさがある。

日本放送芸術学会設立

弘前大学 太田 敬 雄

東北比較文化学会発行による『パディチャイエフスキ論』に端を発して、設立の準備が進められておりました上記学会が、四月四日上智大学において、設立総会を開催、正規に発足いたしました。会長に江上照彦氏(相模女子大)、副会長

に椎野正之氏(大正大)と瓜生忠夫氏(評論家)、また顧問に内村直也氏(作家)を選出し、放送芸術製作関係者と研究者が一堂に会するユニークな学会として期待されています。お問合せは第二事務局担当の弘大・太田まで。

T A C C行事記録

○第二回例会(54・11・17(土))

於 弘前学院大学会議室

山浦先生の講演と研究発表が次の如く行われた。

研究発表

1 Riehlの生成と発展

弘前学院大学 佐藤幸正

2 Chavetskyのテレビドラマについて

弘前大学 佐藤憲和

講演『ヘニスの商人』に学ぶ

弘前学院大学 山浦拓造

○T A C C第二回大会(56・7・7(土))

於福島市(「えびすグランドホテル」)

午後一時より、「会報」一号御案内通り、総会・研究発表・シンポジウム・講演が行われた。なお、福島支部(支部長

森一)の発足に伴い、支部長のごあいさつがあった。また、第三回大会の会場として弘前が選ばれる。

○第三回例会(55・10・14(火))

於 弘前学院大学

55年7月6日から10週間、文部省とブリティシユカウンスルによる「私立大学

等英語教育担当教員の連合王国派遣」というプロジェクトに参加し、この度帰国した片石静子先生(弘前学院)の帰朝報告「イングランドの10週間―歴史と文学散歩」をスライドを見ながら聞いた。

○福島支部十一月例会(55・11・16(土))

於 校の聖母短期大学

一、支部長挨拶 支部長 森 一

二、懇話会―「人間と老化」―

司会 斎藤英二

発題者

「文学作品にあらわれた老人像」 芳賀 薫

「人間と寿命」 南条善治

「生物と人間の老化」 森 一

三、懇話会「今後の支部運営について」

司会 引地岳雄

○T A C C役員会(55・11・2(土))

於 弘前大学

第三回大会を56年6月6日(土)弘前学院大学と決定する。今後の大会を6月の第一土曜日とする。講演者に東北女子

大学学長 石川茂雄氏を内定する。

出席者(芳賀・西村・佐藤(憲)・太田・小林・佐藤(幸))

○「英語青年」に第三回大会研究発表者の公募依頼(56・1・20(火))

同誌(4月号)にその旨掲載される。

○「チャリング・クロス街84番地」(開文社)第二版発行(56・2・22)

芳賀薫編・Helene Hanftと「チャリング・クロス街84番地」(開文社)は表

題テキストの参考資料として編集された論文集であるが、この度第二版がT A C Cより発行されることになった。希望者は事務局まで(一部三百円)。なお57年1月にはヘレン・ハンフ「ブルームズベリィ街の公爵夫人」がテキストとして開文社から出版の予定。

○第三回東北比較文化学会案内

左記の通り、弘前学院大学にて一時より開催される。

記

一 総会 13時

一 研究発表 13時40分

司会 弘前大学 岩岡豊麻

1 日本人の感性と演劇

劇団「夜行館」座長 笹原茂朱

2 言語比較上の一考察

東北女子大学 藤原康作

3 姓名・地名の分布からみた日本と欧米諸国の比較

福島県立医科大学 森 一

一 シンポジウム「文学と映像」15時20分

司会 福島県立医科大学 芳賀馨

1「アルタート・ステーツ」脚本と映画

弘前大学 太田敬雄

2「テス」その映画と文学 弘前大学

佐藤憲和

3 映画芸術の国際性 福島県立医科大学 芳賀馨

一 講演 16時30分

気候の変化からみた北東北の植物分布

東北女子大学 石川茂雄